

令和6年度 学校評価・学校関係者評価書

1 学校運営の目標・方針

「元気に明るくともに学ぶ子」
自ら学ぶ意欲と 他を思いやる優しい心をもち 未来をたくましく生きる東っ子の育成

2 本年度の重点目標

1. 学びの 楽しさを知り、積極的に 自分の考えを持ち 学習する子(学ぶ意欲の育成)
2. 自分から進んであいさつができ、人との対話を楽しむ子(コミュニケーション能力の育成)
3. きまりを守り、人となかよくする子(公共心と人権尊重の精神)
4. 心身の健康を保ち、元気に活動する子(心身の自己管理)

3 学校自己評価結果 A:十分達成している(そう思う) B:おおむね達成している。(ややそう思う)
C:どちらかというと達成されていない。(あまりそう思わない。) D:ほとんど達成されていない。(そうは思わない。)

分野	評価項目・取り組み内容(指標)	達成状況	学校の取り組み状況・改善の方策
学校運営	・学校教育目標や学校経営方針を教育活動に反映し、日々の教育活動を学校だより・学級だより・ホームページ等で分かりやすく伝えている。	A	・学校、家庭、地域との連携のため学校だよりは学校経営方針や毎月の行事予定、教育に関する所感を掲載し自治会長、児童委員、町議会議員(校区)の皆さんに郵送や児童を通じて配布し、各地域で回覧していた。保護者には学校だよりのデジタル配信が定着した。学校ホームページでは日々の教育活動についてできる限り情報発信し、家庭や地域との連携に努めている。今後は保護者のみならず、地域の方への学校だよりのデジタル配信等にも検討していきたい。
	・学校行事の時期や内容は適切である。	A	・学校行事がコロナ前に戻り、以前と同様にすべての行事を開催することができた。4月の参観日には人数制限もなく、多くの保護者の方、地域の方に授業の様子を参観いただいた。11月29日には播磨東地区国語教育研究大会を開催したため運動会と音楽会の開催時期が近くなり、保護者の方へ負担をおかけすることになった。来年度は従来通り大会を予定している。学校行事は学校生活に潤いを与える重要な役割を担っている。今後も児童がより意欲的に学校生活に取り組めるように行事の時期や内容について改善策を考えていきたい。
	・清掃が行き届いており、美化に努め、校舎内外の物が整理整頓されている。また、定期的に施設・設備の点検をしている。	A	・毎月、月末大掃除の日を3日間設定し20分間の清掃活動に児童・教職員で取り組んでいる。運動会前には、縦割り班による草引きや石拾い等にも取り組んだ。20分という限られた時間の中であるが、児童と教師が丁寧に清掃活動を行っており、児童には、校舎等を大切に使うよう呼び掛けている。施設・設備の安全点検は、教職員が毎月、校舎内外の設備等の点検を行い、不具合箇所については、営繕担当教員が早急に修理や部品交換を行い、安全確保に努めている。
	・いじめ・不登校問題等への対応は適切で、教職員が一致協力できる生徒指導体制ができています。	B	・不登校に関しては、10月から校内ふれあい教室に指導員が配置され、本教室を活用する児童の居場所作り、個に応じた対応、保護者との連携に努めている。また、稲美町ふれあい教室とも連携を密にし、情報共有に努めている。いじめ対応については、報告、連絡、相談の徹底とともに、対応の徹底による児童の情報の情報を全職員で共有し、支援方法を検討している。困りごとアンケートの分析と事後指導の経過観察、道徳の授業を通してより人間関係の構築に努めている。年2回の困りごとアンケート、学校独自に学期はじめに実施する生活アンケート後は、アンケート結果に基づき担任と児童が面談し、児童の困りごとが認知されたときは、生徒指導担当を中心に迅速に組織対応し、その後の経過観察に努めている。
	・危機管理マニュアルを作成し適切に運用している。登下校の安全指導や学校事故防止に努めている。	B	・避難訓練(火災、不審者、地震)を年間3回実施。夏季休業中には、加古川警察の方に来ていただき不審者対応研修を実施した。今年度は、不審者が校内に侵入したという設定で実技研修を行い、児童の命、教員自らの命を守るための行動について、ポットラインの活用法、さす又での不審者への対応の仕方等実地練習を行い教職員は自分ごととして研修に取り組むことができた。年度当初には警察の方等による交通安全教室を実施し、全児童を対象に、自転車の乗り方、安全な登下校などについて学習を行った。4月には児童委員、地区担当教職員引率のもと、110番の家の確認を実施。また、教員による下校指導を毎月定期的(緊急時にはその都度)に実施し、登下校時の児童の安全確保に努めている。今後も安全な登下校、交通事故防止や、危険箇所への対応、不審者対策等について、家庭、地域と連携し継続して取り組んでいく。
教育課程	・授業方法を工夫・改善し、分かりやすい授業を心がけている。	A	・「主体的・対話的で深い学び」を充実させるため、年度当初の5月に研究推進長による全校研究授業を実施し、事前事後研修を通して、授業の方向性を全教職員で共有し、1年を通して授業力向上に努めた。播磨東地区国語研究大会にむけて、タブレット端末を効果的に活用し国語的な見方・考え方を豊かにする授業づくりの研究を行った。今後も、児童の学習意欲をさらに高められるよう研修を継続していきたい。
	・評価(授業評価・学びの姿等)を通して、適切な指導をしている。	A	・講師を招聘して学習指導要領に基づく評価に関する校内研修を重ね、学校評価の在り方、学習評価の基本構造、観点別学習状況の評価について教職員の理解を深めた。昨年度から全校統一でルーブリック評価の活用を研究し、毎時間の最初にはTODAY'S GOALを各自が設定し、授業の最後に児童が評価する取組を行った。児童が努力した点や成長した内容については褒め、今後努力が必要な点については、具体的にどのような学習行動が必要であるかを児童の発達段階に応じて説明し、励ましながら指導している。今後も、児童の学習意欲をさらに高められるよう研修を継続していきたい。
	・児童に家庭学習(宿題等)や学習準備等の習慣を身につけさせている。	A	・家庭学習や学習準備等の定着には、児童の意欲を高める指導が大切である。児童の学習意欲を高めるため、長期休業中には1人1台端末を用いて、各自が主体的に取り組める家庭学習の定着を目指して取り組んだ。また、担任と児童がメールでのやり取りをし、学習課題への質問等にも迅速に対応し、児童の学習意欲向上に努めた。今後も児童の学びに応じた課題の設定、声掛けを工夫し、家庭との連携を密にし、時間をかけて対応していくことが必要である。
	・体験的な学習や問題解決的な学習を積極的に取り入れている。	A	○児童の「自立」にむけては、体験的な学習、問題解決的な学習を通して、自己認識や自尊感情を高め、人としての在り方や生き方を考えさせることが必要である。今年度は、日本の伝統楽器等の体験、地球音楽の旅(世界の楽器体験)、自然学校、ふるさとの先輩事業、地域の伝統行事を学ぼう、環境体験(天満大池でのアサザの植樹)、水辺の里公園でのホタル幼虫放流等、児童の発達段階に応じ充実した体験活動を行うことができた。今後も、体験的な学習、問題解決的な学習の充実に取り組んでいきたい。
	・道徳の授業を大切にし、内容の充実にも努めている。	A	・いじめ問題、情報モラル、明日に生きるを活用した震災学習等、適切な教材を設定し授業を実施することができた。授業ごとに、児童の発言や振り返りを記録・蓄積し、児童の学習状況や成長の様子を継続的に把握することに取り組んでいる。また、評価の充実のため、児童の心の変化の読み取り方の改善にも取り組んだ。今後も道徳研修を継続し、授業の充実にも努めていく。
	・読書活動を充実させている。	B	・毎月1回「家族の日」を設定し、家庭で読書に取り組み、全校生、保護者が感想を記入する活動を行っている。保護者も読み聞かせの時間を確保することで、子どもとコミュニケーションがとれた等の意見が寄せられ、家庭での読書習慣の啓発に努めた。図書委員会では、児童集会でおすめの本を紹介したり、図書委員が各教室に出向き、お気に入りの本を紹介したりする活動を続けた。今後も、家庭と連携をはかりながら読書活動の充実にも努めていきたい。また、今年度は、稲美町ビブリオバトル数名の児童が積極的に参加する等、児童自身の自主的・自発的な読書活動に繋がりがつた。

4 総合的な学校関係者評価

・日々の生活や各行事等で学校運営の目標・方針を意識し、教育を行っていると感じている。時代の変化に合わせた授業内容の改善とともに、挨拶や仲間の思いやる心情を育む教育もっており、教職員の日々の努力を感じる。今後、稲美町や地域の歴史を学び、今後も稲美町に誇りを持ちたいと思う児童の育成に努めていきたい。

・国語科の研究発表大会では、児童の主体的な態度を育成するために、学年の実態に合わせてさまざまな工夫や配慮がされた授業が行われていた。1人1台端末を活用し、自分の考えを積極的に発表するなど、生きるための大切なスキルを小学校で学習できていると感じた。

・児童の力を発揮させるために、幼少期から話を聞ける「いい聞き手」になることが大事だと思う。教職員が研究推進で取り組んできたように、児童がコミュニケーションを取りながら学習を進めていくことで話したいという意欲が高まり、表現力も豊かになる。そうして培ったコミュニケーションスキルは、大人になっても生きていく力になるので、これからもその力を伸ばす取り組みを継続してほしい。

・授業参観では、6年生が自分の事を発表していたが、理由や達成のための計画を自分で立てて発表し、聞いた児童や保護者が質問や助言をしてくれればよかったと思う。

・運動会や音楽会等で、昨年度よりもレベルアップした行事があったことがよかった。授業以外でも、学校行事や地域との交流を通して、児童一人一人が自分のペースで、心身ともに成長している。そしてそのペースに教職員が寄り添い、あたたかく見守っている様子がよくでき、大変感動した。

・縦割り班活動等の取組を積極的に取り入れ、児童に大きな刺激を与えている。これからも稲美町や天満東小学校に愛着をもって生活できるよう、継続した指導を願う。

5 評価項目ごとの学校関係者評価

学校自己評価の結果及び改善方策についての評価
・学校の活動状況は回覧板での学校だよりやホームページ等で確認でき、特に問題はない。 ・保護者のためのアプリによる文書の配信等の運営は、丁寧にこなされている。従来の紙での連絡に比べてスマートフォンでいつでも確認できる上に、保護者に渡し忘れの心配もなくなった。欠席連絡も行えるようになるなど、ますます保護者の利便性が上がっている。今後でもデジタル化を推進し、費用と時間の効率化を目指してほしい。修学旅行の様子等より更新されていて保護者の安心に繋がっている。 ・学校だよりには、単に行事を確認するだけでなく、学校の在り方や教育方針、校長の思いなど、多くの情報が詰まっている。デジタル配信が主流になっても、地域へは紙媒体で読めるように配慮して下さっていることに感謝している。 ・個人的な連絡も丁寧にこなされていており、保護者は安心して子どもを任せられているように見える。 ・多くの行事が、時期を見極めながら計画的に行われていると感じた。天候により判断が難しいものもあったが、保護者にとっても納得できるものでよかったと思う。 ・各行事ごとの運営方法に気を遣い、児童や保護者のために十分配慮していただいている。今年度特に大きな問題なく、各行事を行っていたことに感謝している。 ・いじめや不登校の問題は、友人関係以外にも、学校生活や家庭環境が複雑に関係している。児童自身の心身の状態もその時々によって違うと思うが、担任やふれあい教室の指導員が丁寧に一人一人へ寄り添い、児童の様子を見守って下さっている環境に安心感がある。 ・いじめが年々増加している現状、被害者側のサポートが充実することはいよとと思う。加害者側への指導や見守りについては、個別指導と全体指導の両方が必要。これからも、いじめについては学校全体で向き合い、一つ一つ解決していくことを望む。 ・縦割り班活動が昨年度から継続して行われ、学年を問わずに児童がコミュニケーションをとれていることはすごく良い取り組みだと思う。 ・校舎内外ともに清掃が行き届いていて、来校しても清潔な気持ちでいられる。 ・震災から30年の今年、音楽の授業や全校集会で「しあわせ連べつ」を歌ったり、その当時被災された方の話を紹介したりするなどの取組については家庭でも話題になった。30年の節目に良い取組をしていただき感謝している。避難訓練は様々な場面を想定して行われおり感謝している。 ・不審者が行われた際には、すぐに児童が大人に伝え、保護者・地域の方々の連携により迅速に対応することができた。今後も指導をお願いするとともに、登下校の安全確保は、学校・保護者・地域が協力して行い、多くの目で児童を見守ることが大切だと感じる。 ・学校周辺は田畑が多いが、校区内には果道もあり、大池がバリエーションも予定されている。特に自転車車の交通ルールについて、一旦停止し降下しと守るよう指導いただきたい。 ・コロナ以降、1人1台端末を使った学習が学校生活の中ですっかり定着した。家庭学習でも、正解するまでやり直しができ、ゲーム感覚で取り組みながら学習の内容の定着に繋がっている。使用時間も決められており、自分なりに考えながら宿題をする時間や順番を子どもが考えているのがよい。 ・1人1台端末を使って自分で調査し、資料を作成するだけでなく発表までできおり、児童の主体性を育むことに寄与していると感じられる。それぞれの学年の実態に応じて、よりいっそう多面的多角的な学習に繋がればよいと思う。 ・国語科の研究発表会では、児童の主体的な態度を育成するために、学年の実態に合わせてさまざまな工夫や配慮がされた授業が行われていた。1人1台端末を活用し、自分の考えを積極的に発表するなど、大切なためのスキルを小学校で学習していることに敬意を感じた。 ・参観日や国語科の研究会に参加したとき、各学年によって発問や授業の行い方に創意工夫を感じた。先生方がいきいきと授業をされている姿を目の当たりにして、児童は幸せだと思った。指導力が高く、児童の意欲を引き出しながら深い学びへと導く先生の存在は大変ありがたい。 ・専科の教諭による指導がとても分かりやすいと子どもから聞いている。専門性を活かしながら児童の視点で授業を行っているところに、熱心に授業研究を行っていることがわかる。 ・オンラインによる授業やメールでのやり取りなど、学習に対してさまざまな方法を考え実行している教職員の取組に感謝したい。 ・発表や文章などから児童の心情やその変化を読み取ることもとても難しいが、個々の思いに寄り添い、小さな成長を見出さるような取組をこれからもお願いしたい。 ・子どもの活字離れが言われて久しいが、本を読むという行為が大人も少なくなっている。読書習慣を身に付けるには、家庭の協力が不可欠である。スマホやタブレットを持つことが一般的になっている昨今だからこそ、さまざまな本に児童が出会う機会が貴重なものになる。「親子読書」や「デジタルデックス」の取組は、ゲームやスマホ、テレビから離れるよい機会となり、家庭への啓発と読書の推進にもつながった。このような取組の継続を願う。 ・アサザの保護、ホタルの幼虫放流等の環境体験活動は、児童にとって稲美町でしかできない貴重な体験となっている。さまざまな体験活動により、児童は見聞が広がり興味や関心が高まったことと思う。アサザの植樹では、手足がドロドロになりながら作業を行い、草引きや清掃作業などにも積極的に取り組んでいた。昨年放流したホタルの幼虫が夏に成長となり、水辺の里公園でたくさん飛んでいるのを見て、子どもがとてもうれしそうにしていた。郷土を知り、自然を身近に感じ、地域から学ぶ取組を地域と連携し継続して行うことによって、ふるさとへの愛着を一層深めてくれること期待している。 ・ネット社会発達に伴い、情報を簡単に得られるようになっている。しかしネットの情報がすべて正しいわけではないということを認識できるよう教育願いたい。

分野	評価項目・取り組み内容(指標)	達成状況	学校の取り組み状況・改善の方策
課題教育	・生命の大切さ、共に生きる豊かな心の育成に努め、地域の人々との関わりを通して、実践的な力を培っている。	A	・道徳を中心に各教科、行事等、教育活動全体を通して、命の大切さや人と人との豊かなつながり、人権尊重の心を育てていけるよう心がけている。3学期にはPTA研修部と連携し、助産師さんによる「命の授業」を計画。5、6年生児童、保護者、地域の方々ともに命について考える機会とした。また、授業後の感想を学校だよりで紹介し、生命の大切さについて共に考える機会の設定にも努めた。保護者や地域の方々とともに体験する行事は、児童にとっては貴重な機会であり、今後も地域と連携した行事が実施できるよう努めていきたい。
	・環境体験学習・自然学校等で体験活動を充実させている。	A	・環境体験学習では、3年生は天満大池でのアサザ保護活動に参加。また2年生が今年度も水辺の里公園で行われるホテルの学習、ホテルの幼虫の放流活動に参加。5年生の自然学校は予定通り6月に4泊5日でハチ高原の自然の中で活動を行うことができた。大きな学びのある5日間となった。環境体験学習、自然学校とともに自然の中で充実した体験活動を実施することができた。郷土の自然を大切にすることや、自然の中で友達と協力しながらの体験活動は、児童にとっては貴重な体験であるので、来年度も児童の発達段階に応じた学習内容を工夫しながら進めていきたい。
	・計画的に避難訓練等を実施している。	A	・4月に災害対応マニュアルを全教職員で見直しを行い、今年度は、5月火災、11月の不審者対応、1月地震の避難訓練を実施した。Jアラートや稲美町防災無線による訓練放送が流れた瞬間に、全児童が一瞬で地震対策の基本である「Drop」「Cover」「Hold on」の行動ができていた。また、訓練後は、Googleフォームを使った振り返りアンケートを実施し、結果を学校だよりで家庭や地域に報告した。アンケート記述欄では、訓練の重要性について触れている児童が多く見られた。自分の命を自分で守ることを意識させるため、今後は、教室以外や休み時間に実施するなど訓練の充実にも努めていきたい。
	・外国語を通じて積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成している。	A	・外国語活動(3、4年)、外国語科(5、6年)ともに英語専科、ALT、担任が連携して授業を進めている。中学年では、「聞くこと」「話すこと(やりとり)」「話すこと(発表)」を中心に外国語に慣れ親しみ、高学年では、「読むこと」「書くこと」を加えてコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の育成に努めている。今年度は児童が外国語でコミュニケーションを行う目的、場面、状況設定等、目的意識をもって学習に取り組めるよう指導を工夫して授業を行った。また、タブレット端末も効果的に活用し、児童の学習意欲の向上に努めた。
努力目標	・学校は授業や体験学習を通して、自ら学ぶ意欲を持って、学ぼうとする児童を育てようとしている。	B	・学校教育目標を「自ら学ぶ意欲と他を思いやる優しい心をもち未来をたくましく生きる東っ子の育成」と掲げ、毎時間の授業のはじめにその時間の目標を提示し、終わりには振り返りを行うことにより、目標が達成できたかどうか各自で確認している。タブレット端末を積極的に活用しながら、「わかった できた」という学びの充実を味わうことができる授業づくりに努めている。
	・学校は、学校や家庭地域で自分から進んであいさつできる児童を育てようとしている。	B	・「めざせあいさつ日本一」を合言葉に、自分から進んであいさつできる児童の育成に努めている。登校時、下校時、校内では気持よくあいさつができる児童が増えているが、地域での挨拶ができないという声もいただいております。学校、家庭、地域が連携して今後も取り組んでいきたい。
	・学校は児童が多様性を理解し、自分も友だちも大切にできる子を育てようとしている。	A	・児童会活動では「自分から動く(考動)」を呼びかけ、誰かが困っていると思ったら声をかけたり助けたりする、協力して活動する、話をし合う、話を聞く、友だちのいいところをみつける等について児童集会で全校生に呼びかけている。9月のオーブンスクールでは、車いすのシンガーソングライター小西 達也さんに来校いただき「こまったときは、おたがいきま」というタイトルで全校生、保護者、地域の方を対象に講演会を実施し、児童、保護者、地域の方々が「障害のある人の人権」について学ぶきっかけを行った。
	・学校は、体育・保健学習や食育を通して、自分の体や心を大切にしようとする心を育てようとしている。	A	・栄養教諭による食育の授業、健康委員会による給食クイズ、生産者さんへのお礼の手紙等、学校校全体で食育に取り組み、特に食に関する自己管理能力のカリキュラムによって持続可能な食育に取り組んだ。体育では授業だけでなく、スポーツテスト、運動会、駆け足チャレンジ等を行うことで児童が興味を持って取り組み、体力向上につながるよう努めている。
	・学校は、話したり書いたりすることを通して、自分の思いを相手にしっかりと伝えられる子を育てようとしている。	A	・各教科の学習において、児童が発表ノートを活用し自分の思いや意見を交流したり、みんなの前で自分のプレゼンを大型提示装置に映し出し説明をしたりする機会を多く設定している。1人1台端末を効果的に活用した「個別最適な学び」と友だちと意見を交流しあい学びを深める「協働的な学び」を意識的に授業の中に組み込み、自分の思いを相手にしっかりと伝えることができる児童の育成に努めている。今後も継続して指導に取り組んでいきたい。

自己評価における特記事項

- ・昨年度5月に新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、今年度は保護者や地域も方々のご理解、ご協力のもと教育活動を従来通り実施することができた。
- ・昨年度から実施している縦割り班活動に保育園、幼稚園との連携も組み入れ、異学年交流に力を入れて取り組んだ。縦割り班による遊び、運動会での大玉送り、縦割り給食、大縄、チャレンジランキング等を行い、児童の自己有用感や自己肯定感の育成に努めた。
- ・2学期終業式の日にはインフルエンザ、体調不良による欠席児童が多く、急遽、体育館で予定していた終業式をオンラインに変更したが問題なく実施することができた。校内におけるICT活用が定着していることが伺える。
- ・学校運営協議会を中心に、学校、家庭、地域がお互いに連携、協働して子どもたちの教育に取り組んでいくため、家庭との連携を密にし、家庭教育に関する必要な情報の提供を積極的に行っていく。
- ・今年度も昨年同様、町づくりひがし主催によるオセロ大会、スポーツ大会、どんどこ大会が実施される等、地域行事が活発に行われ、学校からもそれぞれの行事に教職員も参加し、学校、家庭、地域の連携に努めることができた。どんどこ大会では餅や芋を焼き、子どもたちも多く参加し、保護者、地域の方々、子どもたちが一同に会し、一緒に食し、会話する場面が戻り運動場に笑顔の輪が広がった。播磨東地区国語教育研究大会が11月開催となったため今年度のPTCAは2月実施となったが、オーブンスクール、チャレンジキングを盛大に実施することができた。PTA本部役員の皆さん、まちづくり東の皆さん、稲美中学生による店を出店いただき、地域の大人、中学生、小学生がくれ合い、地域交流を図ることができた。また、今年度も、地域に根ざした伝統文化や芸術文化にふれる機会を多く設定することを通して、地域を大切に思う等、ふるさと意識の醸成に努めた。
- ・校内音楽会の最後のプログラムとして稲美町出身、ふるさと先輩である畑岡知子さん(ピアニスト)によるミニコンサートを実施。プロのピアニスト演奏を全校生が間近で体感できる機会を得、本物の芸術に触れ児童の創造性、コミュニケーション能力の育成に繋がった。ボランティアクラブでは地域貢献活動として地域の介護老人保健施設を訪問し、わらべうた、むかしあそびを披露した。コムスク委員さんも同行いただき、「地域とともにある学校づくり」の推進に努めた。
- ・登校時の「おはようございます」校内で教職員や来校者への「こんにちは」、下校時の「さようなら」など、その場に適したあいさつが校内ではできているが、コロナ禍以降、あいさつの声が少ない、地域ではあいさつができていないとお声もいただいている。「いつでも、どこでも、だれにでも、自分からあいさつができる児童の育成にむけ、家庭、地域と連携しながら取り組みを継続していきたい。
- ・家庭におけるよりよい学習習慣や規範意識等の社会性の育成については、学校と家庭がさらに連携を密にしながら取り組んでいく必要がある。引き続き、児童の自尊感情や、自己有用感を高めながら、児童、保護者との信頼関係を基盤に、教育相談の充実を図り、安全、安心で質の高い学習環境の整備に努めていきたい。

学校自己評価の結果及び改善方策についての評価
・小学校児童の道徳教育は特に大事である。他人を思いやる心を育てていただきたい。 ・命の誕生について、5、6年生が「いのち語り隊」の話を聞く出前授業に参加した。とてもわかりやすく、児童たちは質問しながら熱心に助産師さんの講話を聞いていた。2年続けと同じ講師の方の話を聞くことにも意義があると感じた。よい機会なので継続していただきたい。 ・様々な工夫された体験活動や自然学校等で、座学の授業では学べない内容を体験できていると思う。 ・自然学校では、5日間も子どもと離れて過ごしたことがこれまででなく心配だったが、帰ってきた子どもの表情を見て、活動が充実したものであり、その中で少し成長したことがうかがえた。引率にいただいた教職員に感謝したい。 ・稲美町独自の体験活動によって、大人になってから稲美町が好きで、ふるさとを大切に守ろうとする大人になってもらいたい。 ・アサザの植樹体験等、環境体験を経験したことが子どもたちの心にいつまでも残っているように思う。児童期に自然の中で身体を動かしたり学んだりして楽しめる環境と出会うことがとても大切。今後も続けて計画と実施をお願いしたい。 ・定期的に避難訓練等、災害に備えて訓練が実施されており、訓練の重要性と「自分の命は自分で守る」という意識づけは充実している。児童の防災意識も向上しているので、縦割り班を活かしたり休み時間に行ったりする訓練があってもいいのではないか。訓練がより自分事となり、責任感をもつことにもつながると思う。 ・地震だけでなく火災や水害等、何が起こるかわからない状況なので、Jアラートだけでなく、学校独自で工夫してあらゆるケースを想定しての訓練をこれからも継続して実施していただきたい。 ・外国語の取組についての達成状況が進展し、ALTや先生方の日頃から楽しい授業の雰囲気づくりであったり、児童を学習の中心として積極的なコミュニケーションをとったり、日頃から地道に努力を続けてきた成果だと思ふ。 ・6年生の外国語の授業を参観したとき、どの児童も隠せずには身振り手振りを交えて、活発に英語で会話をしているところを目の当たりにした。英語を使って流暢に話し合いができる日も近いのではと思った。今後の取組にも期待したい。
・「わかった」「できた」と充実感を味わうことができる児童が多いのはよい。今後も継続してわからないことを「わからない」と言える児童に育ててほしい。 ・登校時に児童を見かけると、しっかりと挨拶ができてくる児童が多い。笑顔で登校しており「学校が楽しいのだな」と元気をもらって出勤している。 ・「あいさつあいさい運動」により、自ら挨拶できる児童が増えていると感じる。 ・校内では、先生方が率先して挨拶しようとしている様子を多くの児童が見ている。一方、地域では知らない人に挨拶しにくいということに加え、家族や地域の中で日常的に挨拶の習慣が培われていないような気がする。学校からも折に触れて、家庭内での挨拶やコミュニケーションの大切さを伝えていただけたらと思う。 ・東小の児童は、特に友だちと仲が良く、友だちのことを大切に思っていると感じる。引き続き学校全体で、友だちを大切にできる気持ちを育成する教育を継続していきたい。 ・自分を大切にしない人は、他人を大切にできない。人権学習では、まず自分を大事にすること、うれしい、楽しい、いやだ、悲しいなど、どんな気持ちも受け入れ、自分自身を大切にすることを学んでいる。 ・児童同士のトラブルについては、丁寧に些細な対応がなされていると感じる。その場で終わらず、長期的な視点で児童を見守っていくことも必要だと思う。 ・給食は「美味しい」と児童はみな口をそろえて言っている。児童の健やかな成長には、睡眠・運動に加えて栄養バランスがとれた食事が重要。家では嫌いなものは食べないが、給食だと減らしてでも食べている。安全・安心な学校給食は、保護者にとってもたいへんありがたいことだ。 ・コムスク座談会では、遊び時間の有効活用や昼休みの時間を増やせないか等、各々のテーマについて自分の考えをまとめてプレゼンテーションを行う6年生の姿に感動した。大人がその考えを受け止めたことで、児童も充実感を味わえたと思う。 ・国語科の研究大会ではICTを学年ごとに工夫して活用し、発表の方法も様々で、とてもよかった。 ・縦割り班活動で行う異学年での交流は、大人になってからも多いに役立つ取組である。継続願いたい。 ・あいさつは校外まで広げることが難しいと感じる。恥ずかしい、知らない人、等のハードルがあるが、本校の児童は知っている人にはしっかりと挨拶できていると思う。

項目以外での来年度の課題や具体的改善方法

- ・令和6年度の全国学力・学習状況調査における質問調査の「自分にはよいところがあると思いますか」という問いに対し、昨年度と同様約2割の児童が否定的な回答をしている。子どもたちが自分のよさや可能性を認識し、発揮できるようにするためには、学級や学年を越えた多様な他者と協働し、よりよい学級や学校生活を自分たち自身の手でつくることができるようにすることが必要である。児童の自己有用感を高めるため昨年度から、特別活動において縦割り班活動を取り入れ異学年で行う活動を多く行っている。縦割り班活動も2年目になり、高学年の児童に学校のリーダーとしての自覚や自分への自信を高めることができたように思われる。下学年の児童にとっては高学年への憧れが高まり、日々の生活に目標をもつことができつつある。来年度も児童の発達段階に応じた成長を目指し、縦割り班活動の取組を継続していきたい。また、4月当初より保育園、幼稚園とも連携し縦割り活動の内容、日程等についても話し合いを行う等、保幼小連携の取組を積極的に進めていく。今後は、保幼小の架け橋プログラムの一層の充実にも努めていきたい。
- ・今年度も国語科の研究に取り組み、個別最適な学びと協働的な学びの2つの学びを往復し、学習を調整しながら粘り強く取り組む態度や、多様な他者と協働した探究的な学びの力が少しずつ児童に定着してきたように思われる。今後も、1人1台端末を効果的に活用し、児童が情報を収集、思考の整理、意見の発信、他者との意見共有等、有効に行えるような授業改善・研究・研修に努めていきたい。